

タゴール作「ギーターンジャリ」について——その四——

田 中 孝 海

Rabindranath Tagore（一八六一～一九四一）（以下タゴールと呼ぶ）は生涯を通じて、多種多様な創作活動を為したが、その中でも詩歌は中心をなす。

「ギーターンジャリ」(Gitānjali, Gitanjali) は、タゴール自身が初期の詩作と区別して「The Series of Religious Poems」と呼んでいる如く、彼の宗教観を探るためには看過出来ないものである。

如何にも恵まれた境遇に生を享けようと、身近かな者や肉親との死別の悲苦から遁れることは出来ず、取分け愛する者の死に依って宗教心の自覚と深化が見られるのが通情であるが、感性豊かな詩人に於いては尚のことであろう。

一八八四年詩人二十三才のとき、彼の敬愛する Kadambari Debī（一八六九～一八八四）の自殺に遭遇したが、これは青年詩人の魂に深い傷痕を遺した。

また四十一才から四十六才にかけて次々と愛する者との死別の悲しみを経験する。一九〇二年十一月に妻の Mrinālini

Debī（一八七三～一九〇二）を失う、翌年には娘の Regula（一八九〇～一九〇三）を、一九〇四年にはサンティニケターンの学校のよき協力者 Satyacandra Kaya（——一九〇四）、次の年に父 Mahir^(a) 一年おつ息子子甘民蘭那（一八九六～一九〇七）と次々に失くしている。またこの間、一九〇五年にはベンガル分割という国家的不幸に直面し、彼自らベンガルを一つに戻す運動に身を投ずるが、情勢の悪化により、人々の非難を背に受けながらシャンチニケターンに戻っている。

バラモンの家柄に生れ、ヒンズゥ教の宗教改革者を父に持つて育ったタゴールにとって、彼個人としてまた詩人として、絶対者との満足すべき関係の確立を迫られた時期であり、「ギーターンジャリ」はそれらを背景にして生れた。

いまひとつ、母国語であるベンガル語で書かれた Gitanjali と題する詩歌集と同じ名を有つところの作者自身に依る英訳詩集が存在し、両者の間に構成上の変異がみられる。

英訳「ギーターンジャリ」は一〇三篇からなっているが、ベンガル語原作からは五十三篇のみで、残りは他の九つの詩歌集から採られ、その配列も制作順になっていないところから、ある意図を有って構成されているとみる研究者もあるが、一〇三篇の詩の配列には、真剣な読者を戸惑わせるところの異質な詩篇が随所に顔を出す。英訳からフランス語訳をしたアンドレ・ジッドも構成上の欠陥として指摘している。

ベンガル語「ギーターンジャリ」は一五七篇からなっているが、頭部の二十篇は他の詩歌集から選ばれていて、残りの一三七篇の詩歌は一九〇九年八月から一〇一年八月までの間に集中的に生れており、実際に有した日数は九十日である。

このオリジナルな「ギーターンジャリ」と英訳詩集とに共通しているモチーフは、タゴールが自らの生の本質を詩人として自覚し、神を大いな詩人と呼んでいることである。

次に、この「ギーターンジャリ」と前後して、仏陀とその他数えに対するタゴールの関心が脹んでいった事実を看過することは出来ない。「私のタゴール研究の意図するところは、仏教はその故国インドに於いてその存在形式（僧伽）を奪われたが、現代（近代）印度人が、自国の歴史が生んだ世界的教主である仏陀とその教えに対して如何なる理解と関心を有しているか考察することにより、根本仏教に於ける素朴な信仰形態を探究することにある。」

タゴール作「ギーターンジャリ」について（田 中）

タゴールの感受性は自国の文化に深く根ざし養われて来たのであるから、時にはその文学の「様式」に於いてヴァイシュナヴァ派の抒情詩人の衣を纏い、そのテーマはヒンズウ教の神話から得、その思想はウパニシャドの原理から大きく外れるものではなかったことは一端の事実である。

しかし、一八九六年以降仏陀乃至仏教に関する著述が現われて来ることは「ギーターンジャリ」の成立と同様彼の肉親との数々の死別の事実との関連性を否定出来ないであらう。

仏陀乃至仏教に関する彼の考えは、文中で直載的に語られているが、それは詩人としての個性的な語り口であるとは言え、インド人の識者として仏陀とその教えを解し鑽仰するものであり、自国の偉大な遺産を誇り喧伝する口調である。

『タゴールと仏教』に於いて既述しているが、一八八二年に出版された R. Mitra の The Sanskrit Buddhist Literature of Nepal がタゴールを仏典へ誘う機縁になった。一八九七年以降タゴールによって仏典に素材を得た物語詩が次々と生れた。物語詩集 Katha（一九〇〇年刊）二十四篇中仏典を素材とせるもの八篇（他は Citta 派や Maricha 派の典籍から素材を得ている）があるが、そのうちの三篇は後に各々三つの重要な戯曲として発展した。

タゴールが仏典中最も興味を示めたのは Avadāna（譬喻譚、原意は「偉大な事跡」）である。

これらは、悠遠な時間觀念を抱き乍ら單なる流動的な存在論としてではなく、無常觀を基体として生れ育成された業による輪廻説をもとに生れた文学であり、人生を過・現・未の三世に相続し実在するものという見解を固持していたインド民族であればこそ育成、普及し得たものであることを思えば、タゴールがその話の面白さのみに惹かれたのではなく、様々な苦惱を通じて、知性ではなく心情によって得たところの叡知により Avadana に含有されている仏典の智慧を感得したのだといえよう。

ヴィヴェカナンダの設立したヴェーダンタ協會に招かれ主宰した Abhedananda（一八六六～一九三九）は「自我は完全に其の純潔と榮光を發現するために幾生を距てて輪廻し、自己の業を自ら享受しつつ次第に向上して行く。これが業（Karma）の法則である。」と語ったが、タゴール自身も Avadana を單なる道德説話として捉えたのではなく、絶対者との關係を確立するための自己実現の法則として把握していたのだと謂えよう。レオン・フィヤーは「譬喩とは諸々の事実によって行業とその避け難き結果との間に存する縁を示す教訓である。」としているが、仏陀に於いては、吾々が為すところの他人を説得せんがために用いる單純なる比喻を語られたのではなく、三世に相続する個々の行業を如実に認識せられたところを語られたのであり行業と結果とを仏縁に依って好ま

しき方向へ修正せんがためのものであった。

未だタゴールが仏典説話に触れる以前、一八八三年に創られた Prakṛita Pratiṣodha（自然の復讐）という詩劇があり、「生を拒否しないインドの哲人」としての面目を著わしたものとわわれている。（一九一七年 Saṃnyasi „苦行者”と題して英訳されている）

洞窟より出で解脱を宣言した苦行者が町へ来て、両親を失った賤民の娘に遇う場面があるが、これと後年 Bodhisattva-kalpataḥ の Upagupta Avadana を素材にした “Abhisara”（密会の約束）と題する物語詩（Fruit Gathering XXVII に英訳されている）に於ける佛弟子ウパグプタと若い踊り子との出会いを比較し、それをタゴール自身の経験とを重ね合わせる時、そこに宗教的感性の大きな変化と成長をみてとることが出来る。

いまひとつ注目すべきことは、佛典より素材を得て物語詩をものした時期と、それを本格的な戯曲に發展させ、また佛陀を直接に讃仰する詩歌を発表し始める時期との間に概ね十年の間隙があるが、その間に「ギーターンジャリ」に関わる詩歌が生れている事実である。つまり、佛典との触れ合いの後、数々の肉親との死別を通して宗教的な詩歌の創作を経て本格的に佛教への関心が表面化して来たのであり、この点からも「ギーターンジャリ」を始めとする宗教的詩歌の有つ意

義は大きく、タゴールの宗教観を追求する上で重要な意味を占
 んでいると謂えよう。

- 1 田超キリヤ数学研究 Vol. IX No. 1 1961, pp. 174-175' 匡 Vol.
 XIII No. 2 1965, pp. 7 98-796' 匡 Vol. XIX No. 2, 1971, pp.
 884-891'.

- 2 氏 Jyotirindranatha (1849~1915) の妻。

- 3 Debendranātha Tagore (1817~1905) の曾孫。

- 4 Quintessence of Gitanjali by C. C. Chatterji. Nalanda Putli-
 cations, Bombay, 1950. 註註 Vol. XIX, No. 2, p. 885 を参照。

- 5 Rabindranath Tagore L'OFFRANDE LYRIQUE (Gitanjali)
 Traduction d'André Gide, Gallimard.

- 6 フロントに「キーター・ナシヤリ」の簽名と「うしは次の題」。

詩歌 Nos. 篇数 制作場所 期間(ペンカク暦,) 要した
 口数

21~38 18 bolapura Bhadra 月10日 9日
 ~18日1316年

39~40 2 Kalitātā Bhadra 月27日 2日
 ~Āqbina 月1日

41~44 4 Ġlaidaha Āqbina 月19日~30日 4日

45 1 Bolapura Agrhāya 月20日 1日

46~51 6 Bolapura Pośa 月15日~17日 5日

53~54 3 Māgha~Phālguna 3日

小 計 (34篇) (24日間)

55~61 7 Bolapura Chaitra 月26日 6日
 ~Baiṣakha 月12日

62 1 Kalikātā Jyaispha 月3日 1日

タゴール作「キーター・ナシヤリ」のうしは(田 中)

63~74 12 Tinadhariya Jyaispha 月7日~21日 7日
 75~79 5 Kalikātā Jyaispha 月24日 4日
 ~28日

80~110 31 Bolapura Jyaispha 月21日 20日
 ~Āśādha

111~122 12 Ġlaidaha Āśādha 月22日~24日 6日

123~125 3 Kalikātā Āśādha 月31日 3日
 ~Ġrābhāṇa 月1日

126~155 30 Bolapura Ġrābhāṇa 月2日~25日 19日

156~157 2 Kalikātā Ġrābhāṇa 月26日~29日 2日

小 計 (103篇) (68日間)

21~157 137篇 合計90日間

7 フロントに「タゴール著作集」の「ヤン」の1頁開張
 簽「うし」がある。

8 田超キリヤ数学研究 Vol. XVI. No. 2, 1968. pp. 907~898'.

9 Rabindra Racanābali (タゴール全集の巻 雑録の巻) VII'.

10 田超キリヤ数学研究 Vol. XVI, No. 2, p. 899~898. 同し Vol.

X, No. 1, pp. 345~337, Vol. XII, No. 2, pp. 792~798, Vol.

XIV, No. 1, pp. 389~383. 註註うしはのうしを参照せよ。

11 Rabindranath Tagore by Marjorie Sykes, Longmans, Green
 and Co., Ltd, 1943, pp. 33~34.

付記 英語 Gitanjali のうしはをヤンガルの語原作品との対照表は
 Vol. XIX, No. 2, pp. 889~891 を参照せよ。

(龍谷大学大学院修了)